



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

Republic of the Union of Myanmar

— ミャンマー連邦共和国 —

海外事情



大地震からの復興への願い ミャンマー



鷲谷 賢一 WASHIYA Kenichi

株式会社ニュージェック／国際事業本部 国際技術部 プロジェクトグループ
プロジェクトマネージャ

ビルマの竖琴の舞台ミャンマー

ミャンマーは、東南アジアのインドシナ半島西部に位置する国で、中国、タイ、ラオス、インド、バングラデシュと国境を接し、アンダマン海やベンガル湾に面しています。国土は南北に長く、7つの地方域と7つの州で構成されています。

その地形は北部が高く南部が低い特徴を持ち、西部にはアラカン山脈、東部にはシャン高原が広がり、サルウィン川が流れるなど、豊かな自然環境に恵まれています。中央部ではエーヤワディー川（イラワジ川）とシタン川が大デルタを形成し、気候は熱帯季節風気候で雨季と乾季が明確に分かれています。

かつて「ビルマ」と呼ばれたこの国は、映画『ビルマの竖琴』の舞台

としても知られています。人口は約5,750万人で、多民族国家ながら約6割をビルマ族が占め、公用語はビルマ語です。豊富な天然資源に恵まれ、イギリス統治下では東南アジア有数の富裕な地域でしたが、政治的混乱や経済低迷により「最貧国」と呼ばれる時期もありました。2011年からの政治・経済改革で「アジア最後のフロンティア」として注目を集めました。2021年の軍事クーデターにより再



図1 ミャンマーと周辺国

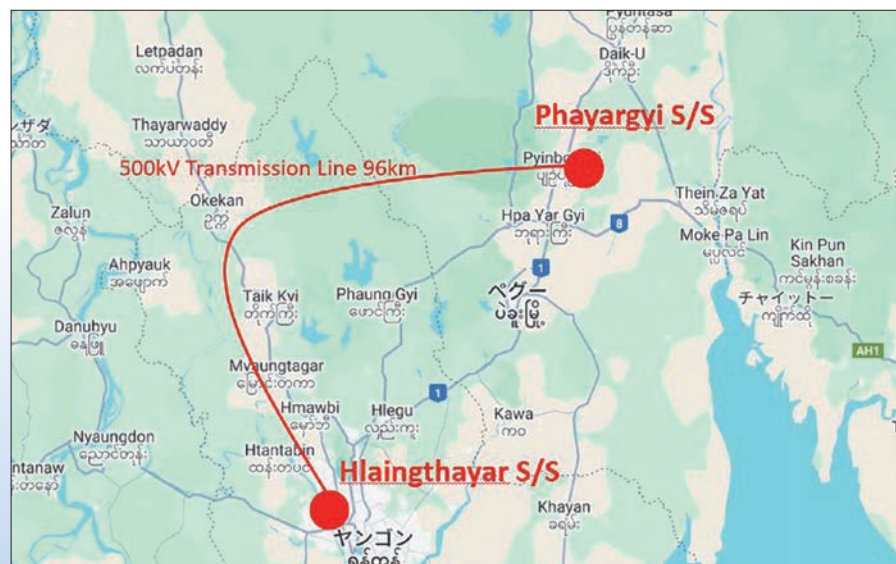


図2 プロジェクト位置図

び軍事政権下に置かれています。

こうした紆余曲折の歴史を持つミャンマーで、当社は関西電力送配電株式会社と共同企業体を形成し、2017年よりJICA円借款事業「ミャンマー国国家送電網開発事業プロジェクト フェーズ2」のコンサルタント業務を行っています。

敬虔な仏教徒の国

ミャンマーは仏教を深く信仰する国で、国民の約9割が上座部仏教の信徒です。仏教文化や仏教的倫理が国民文化の基盤となっており、多くの寺院や仏塔（パゴダ）が点在しています。その中でもヤンゴンのシュエダゴン・パゴダは高さ105mを誇る仏教の総本山であり、黄金に輝くその姿は壮麗です。一方、首都ネピドーにはシュエダゴン・パゴダを模した建物がありますが、その豪華さには及びません。

ミャンマーの食文化

ミャンマーのソウルフードといえば「モヒンガー」です。米粉から作られた麺に魚の出汁スープをかけ、コリアンダー、タマネギ、ゆで卵を添え、お好みでライムを絞って食べるこの料理は、ミャンマーの多くの家庭で朝食の定番となっています。不思議なことに、屋台やレストランでは朝しか提供されず、



写真5 モヒンガー



写真1 500kV架空送電線



写真2 500kVバヤジー変電所



写真3 シュエダゴン・パゴダ



写真4 ゴルフモパゴダに向かってショット

昼前には売り切れることがほとんどです。

また、ミャンマーの食文化は周辺諸国の影響も色濃く受けています。タイやインド、中国、バングラデシュに接する地理的条件から、麺料理、おこわ、肉まん、炒飯、炒め物や揚げ物、さらにはミャンマー風ビリヤニやカレー（ヒン）など、多彩な料理が楽しめます。特に「ヒン」は豚肉、牛肉、鶏肉などさまざまな種類があり、選ぶ楽しさがあります。ミャンマー独特の食材としては「ラペットウ」が挙げら

れます。これはお茶の葉をピクルスにしたもので、揚げ豆や干しエビ、青唐辛子と混ぜて食べる伝統的な料理です。地域ごとにスタイルが異なり、ヤンゴン式はキャベツやトマト、ニンジンなどを刻んで全てを混ぜ合わせたサラダのような形態で提供されます。一方、マンドレー式は食材を混ぜずに提供され、好みの具材を選んで食べる



写真6 ヒン



写真7 ラペットウ（ヤンゴン式）



写真8 地震発生直後のネピドーの道路亀裂



写真9 ネピドーにある当社共同企業体の事務所が入っている建屋（軽度の被害）

スタイルです。このお茶の葉のピクルスは、他国ではなかなか見られないユニークな味わいが特徴です。

ミャンマーの伝統衣装「ロンジー」

ミャンマーでは、ロンジーと呼ばれる伝統的な民族衣装が広く愛用されています。これは日本でいうロングスカートに似た筒状の布で、男女ともに日常的に着用しています。男性用は「パソー」と呼ばれ、腰に巻きつけて前で結ぶスタイルで着用します。一方、女性用は「タメイン」と呼ばれ、エレガントな印象を与えます。このロンジーはシンプルな構造でありながら機能的で、軽やかに履けるのが特徴です。

ミャンマーの民主化運動を象徴するアウンサンスーチー氏も、常にロンジーを着用していることで知られており、ロンジーはミャンマーの文化と伝統を象徴する存在といえます。

ミャンマー人の名前の特徴

ミャンマー人の名前には、姓が存在しないというユニークな特徴があります。この背景には、ミャンマー文化における個人の独立性と平等性を重んじる価値観が深く根付いています。ミャンマーでは、個



写真10 ネピドー既設230kV変電所 油注入前予備変圧器の転倒

人は家族や所属集団の一部としてではなく、独立した存在として尊重されるため、家族名や姓という概念が発達しませんでした。その結果、結婚後も女性の名前が変わることはなく、生涯を通じて同じ名前を使用します。

ミャンマー人の名前を呼ぶ際には、略称を避けることが推奨されています。ミャンマーでは名前が個人のアイデンティティーを強く表すものであり、名前の一部を省略することは、その人への敬意を欠いていると捉えられる可能性があるからです。特にミャンマー文化では、敬称と名前が密接に結びついており、その全体がその人を表す重要な要素となっています。

さらに、ミャンマーの名前は単に

長いだけでなく、その意味や由来が深く、その人の人格や社会的地位を反映している場合が多い特徴を持っています。略称を使うことで名前が持つ本来の意味が失われる可能性があるため、ミャンマー人の名前を呼ぶ際にはフルネームで呼ぶことが望ましいとされています。これは、ミャンマー人の名前に込められた文化的な価値や個人への尊重を示す重要な配慮となります。

2025年3月28日のミャンマー大地震

敬虔な仏教徒が多く、独自の文化を持つミャンマーは、世界でも有数の地震が多い国の一つであることはあまり知られていません。



写真11 ネピドー既設230kV変電所ガス遮断機の破損

同国の中央を南北に走るザガイン断層は、インドプレートとユーラシアプレートの境界に位置し、小規模な地震が頻繁に発生しています。2025年3月28日、このザガイン断層の活動により、サガイン地域を震源とするマグニチュード7.7の大地震が発生しました。

私が業務を行っていたのは震源に近いネピドーでしたが、地震当日は日本への帰国予定日であったため、早朝にネピドーを出発し、比較的ヤンゴンに近いバゴー近郊の現場で定例の打ち合わせを行っていました。打ち合わせ終了直後に地震が発生しましたが、震源から距離があったこともあり、体感では震度3程度だったものの、強い揺れが約2分間続くというこれまで経験したことのない地震でした。

幸いにも、当社共同企業体がコンサルタント業務を担当していた送変電設備には大きな被害がありませんでした。これは、震源地からの距離に加え、耐震設計や慎重な施工管理が功を奏した結果です。



写真12 ネピドーのDPTSC建屋（半壊状態）

具体的には、送電線のルート設計時にザガイン断層直下の鉄塔位置を避けたことや、変電所の架線張力を可能な限り抑える施工管理を行ったことが大きく寄与しました。このような取り組みにより、当社共同企業体の技術力が改めて証明される結果となりました。

ミャンマーにおける地震のリスクを深く理解し、それに対応するための適切な設計と施工管理が、今回のような大規模地震においても設備被害を防ぐ重要な役割を果たしました。

復興への願い

2025年3月28日の大地震では、多くの方々が建物の崩壊などによって命を落とされました。当社共同企業体の発注者であるMOEP（ミャンマー電力省）の関係者やそのご家族の方々も犠牲となり、心より哀悼の意を表すと共に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

震源に近いサガイン地域、マンガレー、ネピドーでは、多くの貴重

な遺産や寺院が甚大な被害を受けました。地震発生直後には、日本を含む各国から援助部隊が派遣され、被災者の救助活動が行われましたが、道路、水道、電力などのインフラ設備の復興は依然として道半ばの状態です。

また、多くの国家公務員の宿舎も大きな被害を受けましたが、未だ復旧の目途は立っておらず、MOEPはじめ多くの国家公務員も長期間にわたり仮住まいを余儀なくされています。

現在の政情を鑑みると、早急な復興は困難を伴うことが予測されます。しかし、親日的な国民性と優秀な人材を有するミャンマーの力を信じ、一刻も早く人々が明るい灯りの下で家族とともに団らの時間を過ごせる日常が戻ることを願っております。ミャンマーの皆様が未来への希望を胸に抱き、平穏な生活を取り戻せるよう、復興への支援と祈りを続けてまいりたいと思います。